紀伊民報
(5)　2008年(平成20年)7月15日　火曜日

水族館へ行こう！ 52

サカサクラゲ

京都大学白浜水族館
久保田　信

クラゲといえば、フワフワと水中に浮かんでいるプランクトン（浮遊生物）の代表選手であるが、中にはこれとまったく違う生態を示すクラゲがいる。サカサクラゲである。これは何時間見ていてもフワフワと泳ぎだすことがないため、イソギンチャクと間違いそうである。まさにベントス（底生生物）として生きる変わり種クラゲだ。

白浜でも見掛ける温泉マークは〝サカサクラゲ〟と呼ばれるが、本物のサカサクラゲはまるで形が違っている。サカサクラゲの傘は円盤形で平たい。この傘を使って砂地などに張り付いている。

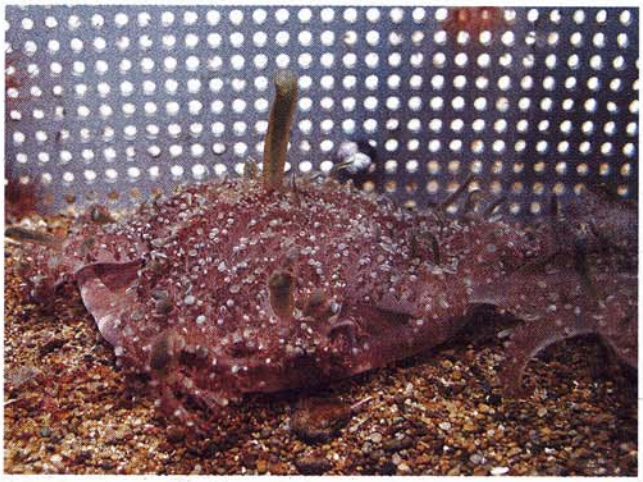
傘から水面に向かってよく伸ばした褐色と白色の草むら状のものは、口が複雑に変形した部分で、口腕（こうわん）と呼ばれる。ここには、緑色の海草のようなものがあちらこちらに生えている。口腕の表面積をできるだけ大きくして、肉眼では見えない単細胞の藻を細胞中に無数すまわせている。この藻たちのおかげで、サカサクラゲは太陽に当たってさえいれば、光合成の産物である炭水化物を藻から頂いて生きていくことができる。その代わりサカサクラゲは窒素を含む排せつ物や呼吸でできた二酸化炭素を藻にあげるのだ。

サカサクラゲはほかにも優れた能力を持っている。それは海水の浄化能力である。生息地の北限となる鹿児島では、分泌した多量の粘液で、桜島から噴き出た火山灰や、すすなど細かい物質をからめ捕って塊にして海底に沈殿させている。海をきれいにする一役を担っているのである。

白浜水族館で展示飼育する動物のほとんどが地元産だが、このサカサクラゲだけはよそから来たものである。そしてクラゲとしては長寿ともいえる6年もの飼育記録がある。

近年、南方系のさまざまな生き物が白浜付近で発見されており、将来、サカサクラゲが分布を広げてくる可能性もあるので留意してほしい。

（京都大学准教授）



△
まるでイソギンチャクのように底に張り付いているサカサクラゲ（水槽番号306）

海水浄化の長命クラゲ